

## 私訳 テレーズ・デスケルー

中 島 公 子

### VIII

ラ・トラウヴ夫妻が打ちひしがれたアンヌをサン・クレールに連れ帰ってから、テレーズは、お産間近になるまでアルジュルズを離れなかった。彼女は11月のいつ明けるともない夜々の間に、あのアルジュルズの静寂を身にしみて味わった。ジャン・アゼヴェドに出した1通の手紙に、返事は来ないままだった。おそらくこんな田舎女は文通の煩わしさに値しないと思っ  
てのことだろう。第一、おなかの大きい女なんていい思い出になるはずがない。離れたところからだと、彼にもテレーズが精彩を欠いてみえるのだろう。あれも偽の複雑さやポーズに騙されやすいばかな男だったのだ！ しかし彼女の本当とは思えないほどの単純さ、そのまっすぐな視線、けっして逡巡しない動作から彼が理解できたものは？ たしかに彼はテレーズを、あの愛らしいアンヌと同様、彼の言うことを言葉通りに受け取り、すべてを捨てて彼についてくることのできる女性だと思っていた。ジャン・アゼヴェドは、攻めてきた敵がゆっくり包囲をとけるように、早々と武器を放棄する女には気をつけた方がいいと考えていた。勝利も、勝利の果実も、何も懸念材料とはならなかったのだ。一方テレーズはこの青年の世界にはいつて生きる努力をしていた。だがジャンが感心する書物類は、ボルドーから取り寄せてみても、彼女には理解不能に思えた。なんという無為な生活！ 産着作りでもしたら、と勧めるわけにもいかなかった。「それは彼女の得意分野ではない」と、ラ・

トラウヴ夫人は繰り返していた。田舎では多くの婦人が産褥で命を落とす。テレーズは、自分も母親と同じような死に方をするだろう、逃れるすべはない、と言ってクララ叔母さんを泣かせていた。またそれに付け加えて「今の生活はもう死ぬのと同じことよ」と言うのを忘れなかった。嘘だ！ 彼女はこの時ほど生きることを熱心に望んだことはなかった。ベルナールもそうだ、彼女にこれほどの気遣いを示したことはなかった。「彼は私を気遣っていたのではない。私がおなかに持っているもののことを気遣っていたのだ。言っても無駄なのに、あのいやらしい声でくどくどと『ピュールをお食べ……。魚はやめておけよ……。今日はよく歩いたね……。』と言う。私は、お乳の質を良くするために大事にしてもらう他所者の乳母よりも、それらの言葉に心を打たれなかった。ラ・トラウヴ夫妻は私の内なる聖なる器、彼らの子孫の溜まり場を崇めていた。疑いもなく、難産となったら胎児のために彼らは私を犠牲にするだろう。自分の個人的生の感覚を私は失っていた。私はブドウの若枝にすぎない。家族の目には、私の胎内の果実だけが大切なのだ」。

「12月の終わりまでこうした闇のなかに生きなくてはならなかった。まるで数知れない松の木だけでは足りないともいうように、いつ止むとも知れない雨が暗い家のまわりに数千万の動く柵を増やした。サン・クレールへの唯一の道が通行止めになりそうだというので、私は市内の、アルジュールズの家より少しは暗くない家に戻った。広場の老プラタナスたちは雨を含んだ風から自分の葉を守ろうとしていた。クララ叔母さんはアルジュールズ以外では生きられないので、住み込みの付き添いは断ったが、しょっちゅう見舞いには来てくれた。いつも彼女の〈道幅に合った幌馬車〉に乗って、子供の頃私が大好きだった、いまでも大好きだと彼女が思っている甘味菓子や、ライ麦と蜜で焼いたミックと呼ばれているクッキー、大きなガレットやチーズを持ってきてくれるのだった。アンヌには食事の時しか会わなかった。彼女は私に話しかけもしなかった。見たところ、諦めているようで、体も小さくな

り、すっかり生気を失ってしまっていた。髪の毛をひつつめにしているので、血色の悪い無様な耳が丸出しだった。誰もドギレムの息子の名を口にしなかったが、ラ・トラヴ夫人は、アンヌがまだウイとは言っていないが、ノンとも言わなくなった、と保証していた。ああ、ジャンは彼女をよく見抜いていた、調教して、云う通りの歩幅で歩くようにさせるのに長い時間はかかるまいと。ベルナールはまた食前酒<sup>アペリティフ</sup>を飲み始めていたので、調子は良くなかった。私のまわりで、あの人たちはどんな話をしていたのだったろう？ 私の記憶では教区の主任司祭の噂をさかんにしていた（司祭館の向かいに住んでいたのだ）。たとえば『どうしてあの人は日に四度も広場を通り過ぎるのかね。しかも毎回別の道を辿って……』ということを疑問にしていた。

ジャン・アゼヴェドの言ったことから、テレーズはこのまだ若い神父に興味を持っていた。傲慢だと思われていて、教区の人たちとの付き合いがないのだということだった。つまり『ここで必要とされるような人柄でない』のだ。たまたま神父がラ・トラヴ家を訪問したとき、テレーズは彼の蒼白いこめかみや秀でた額に目をとめた。友達がひとりもない、ということだった。では夕べをどのようにして過ごすのだろうか？ どうしてこの生活を選んだのか？ 『あの方はとても几帳面なのよ』とラ・トラヴ夫人は言っていた、『毎晩聖体降福式をするのですもの。でも彼の祭礼には温かみが欠けているの。いわゆる敬虔な方だとは、わたしは思いませんよ。それに地域の奉仕事業はどれもうまく行かないし』。彼のせいで青少年育成会が潰れてしまった、と夫人は嘆いた。親たちは彼が子供たちをサッカー場に連れて行かなくなったのが不満だった。『いつも本に首を突っ込んでいるのはご立派だけれど、お蔭で教区はすぐ駄目になったわね』。テレーズは彼の説教を聞きに教会へ行くようになった。『あなたときたら、からだの状態がそれを免除してくれるときになって、わざわざ教会通いをする気になるになるなんて』。神父のする説教は、教義に関するものでもモラルに関するものでも、とくに個性的というわけではなかった。しかし声の調子、なんらかの動作、ときには重さ

の感じられるある言葉、といったものがテレーズの興味を引いた……。ああ、この人なら、もしかしたら、心のなかでこの混迷した世界を解きほぐすことに力を貸してくれるかもしれない。他の人々とは違って、やはり彼もある種の悲劇的な立場を取ったのだし、その内面の孤独に加えて、僧衣スーテンがそれを着る者の周りに作り出すあの砂漠に身をおいているからだ。どのような慰めをこうした日々の祭礼に見出しているのだろうか？ テレーズはできれば日曜日以外の日のミサに行きたかった。そのとき彼は侍者の少年以外に証人のいないところで、聖体パンの上に身をかがめて、典礼の言葉をつぶやいているのだ。しかし、彼女がそんなことをすれば家族や周囲の人たちから変に思われ、彼女は回心した、と騒ぎたてられるのが落ちだった。

その頃いかにテレーズが苦しんでいたと言っても、彼女がほんとうにもう生きることには耐えられなくなったのは出産の翌日からだった。外側には何一つ現れなかった。彼女とベルナルの間には諍いの場面など起こらなかった。義理の父母に対しては、夫が示す以上に礼儀正しく接していた。それこそが悲劇のもとだった、喧嘩の原因ひとつない、ということが。いろいろな事柄はあっても、それらを乗せて死に直行する汽車を止められるような出来事を予見することは不可能だったのだ。不和軋轢とは、衝突する出会いの場を想定するものだ。ところがテレーズはベルナルと出会わないままに日を過ごしていた。義父母とはもっとそうであった。彼らの言葉は彼女にほとんど届かず、それに返事をしようという気すら起こらなかった。いったい共通の語彙を持っていたのかどうか？ 彼らは本来の言葉に別の意味を付与していた。テレーズの口から真心の叫びが漏れても、彼らは若妻が詭弁を弄しているといっぺんで決めつけてしまうのだった。「わたしは聞こえなかったふりをしますからね」とラ・トラーフ夫人は言った、「彼女がしつこく言い張っても、そこには重大な意味などないふりをすればいいのよ。やりそこなった……と思うでしょうよ」

とは言ってもラ・トラヴ夫人は、人々がテレーズと赤子のマリが似通っていると声を上げるのにイライラするテレーズの態度を、大目にみるわけにはいかなかった。ありきたりな誉め言葉（『どう見たってあなたのお子さんですよ』といった……）は若妻を極端な興奮状態に投げ込み、それを彼女は隠すことができないのだった。「この子は私の何も持ってはいないわ。この褐色の皮膚、黒味勝ちな瞳をご覧ください。わたしの写真も見て頂戴。白色の少女だったのよ、わたし……」

彼女はマリが自分に似ていてほしくなかった。自分から出て行った肉体と、もはや何も共有したくなかったのだ。あの女は母性に満たされていない、という噂が駆け巡り始めた。しかしラ・トラヴ夫人は彼女が彼女なりのやり方で娘を愛しているのだ、と弁護した。「たしかに、産湯を使わせたり、おむつをかえたり、といったことは望めませんよ、それはあの人の性分には合わないのですね。でも夕方になるとずっと揺籠のそばに座って、煙草も控えて赤ちゃんが眠るのを見守りつづけているのを、わたしは見ていますのよ……。それに、うちにはとても誠実な女中がいましてね、それからアンヌも。そうそう、アンヌはきっと将来素晴らしい母親になるに違いありません……」。赤ん坊がこの家の中で息をし始めてから、アンヌも息を吹き返したのは事実だった。常に揺籠は女性を惹きつける。しかしアンヌは他の誰より、深い喜びをもって、子供に入れあげていた。赤ん坊のいる部屋に自由に出入りするのために、彼女はテレーズと和睦したのだった。かつての友情から、親しみのこもった仕草や呼び方以外に何一つ残っているものがないというわけでもなかったのだ。少女はとりわけテレーズの母親としての嫉妬を恐れていた。「赤ちゃんはお母さんよりもわたしに懐いているのよ。わたしが眼に入るとすぐに笑うの。いつだったか、わたしが赤ちゃんを抱いていて、テレーズが取り上げようとしたら、大声で泣きだしたのよ。わたしの方が好きなのね。ときどき困ってしまうくらい……」

アンヌは困ることはなかった。テレーズは人生のこの時期、他のすべての

ものと同様、彼女の産んだ娘からも気持ちが離れていた。人も、物も、自分の体も、自分の心さえも、一種の鏡か、自分の外側に立ちこめる蒸気のようなものに映っていたのである。ただ、この虚無の中に、ベルナールだけがおそるべき現実味を帯びていた。彼の肥った体、鼻にかかった声、反論を許さない口調、その自己満足。この世界を抜け出したい……。でもどうやって？ どこへ行けば？ 今年初の暑さがテレーズを打ちのめしていた。それが彼女の転落の時期に当たっていることを、彼女に告げるものは何もなかった。この年はどのように過ぎたのか？ いま思い返しても何の出来事も、何の言い争いも思い出せない。ただ夫をいつも以上に嫌悪したことを覚えている。それは聖体の祝日のことだった。彼女は半ば閉じた鎧戸の隙間から聖体行列を見ていた。ベルナールは司祭を囲む天蓋の後ろに従う唯一の信者だった。街中が暫くの間無人の荒野と化していた。まるで仔羊ではなくライオンが街路に放たれたかのように……。見つけれないように、あるいは跪かせられないように、みんな姿を隠しているのだ。危険が去ると、あちらで一つ、こちらで一つと、扉が開く。テレーズは司祭から目を離さなかった。ほとんど両眼を閉じ、両手にあの奇妙なものを捧げ持って歩いていた。唇が動いている。あのような苦しげな様子で誰に向かって話しているのだろうか？ そのすぐ後ろに「己の義務を果たしている」ベルナールの姿があった。

一粒の雨も降らずに何週間かが続いた。ベルナールは毎日山火事が起こるのを恐れて過ごし、また心臓の具合も悪かった。ルーシャの方で火は500ヘクタールも焼いてしまっていた。「もしも北風だったらうちのバリザックの松は全滅だろうよ」。テレーズはこうした不動の天候から何らかの出来事を期待していた。もしどうしても雨が降らなかったら……。ある日森全体がパチパチ言い始め、人里までがそれを逃れられなくなるかもしれない。ランド中の村落が燃えないとどうして言える？ 彼女は、火焰が常に松ばかり選んで人間を選ばないのを、不公平だと思っていた。家庭では惨事の原因が

際限なく論じられた。煙草の不始末？ 付け火？ テレーズは夢想した、ある夜起き出して家を出る、茨やイラクサがとくに群がっている森の奥に行って煙草を吸い、それを投げ捨てる、明け方の空を巨大な煙が黒く焦がすまで……。しかし彼女はこの考えを追い払った。血のなかに松への愛情を持っている彼女の憎しみが赴くのは樹々の方ではなかった。

いまや彼女は自分が犯した行為と正面から向き合うこととなる。ベルナルにどんな説明をするのか？ どのようにことが起こったかを一つ一つ順を追って思い出す以外にない。あれはマノの大火事の日のことだった。人々が食堂に集まり、家族はさっさと昼飯をすませなくてはならなかった。ある者は火事がサン・クレールからはだいふ遠いと言い、他の者は半鐘を鳴らすべきだと主張した。焼けた松脂の臭いがこの猛暑の日を浸しており、太陽は汚れているようだった。テレーズは今でもベルナルの様子を目に浮かべることができる、顔を横に向けてバリヨンの報告を聞きながら、毛むくじゃらのがっしりした手をコップの上にかざして、ファウラー液の雫が水に落ちるのを数え忘れているのを。それから一気に菓を飲み干した。テレーズは暑さにぼおとしていて、彼がいつもの分量の2倍入れてしまったのを告げようと思いつきもしなかった。火事騒ぎには無頓着で他所事としか感じないテレーズが、このドラマも自分に関係のないどんなドラマに対するのとも同じ無関心さで、巴旦杏の皮をむいているのを残して、全員が食卓を離れていた。半鐘は鳴らなかった。ベルナルが戻ってきて「初めておまえが動かないのが正しかったよ。火事はマノの方だった……」と言った。それから「俺は菓を飲んだかな？」と訊くなり答えを待たずに、もう一度コップに液を垂らした。彼女は怠惰から、おそらくは疲れから、黙っていた。このとき何が起こると思っていたのか？ 「私は自分が黙っていると予想することも不可能だったのだ」。

しかしながらこの夜、吐きつづけ、涙を流しつづけるベルナルの枕元で

ペドメイ医師が昼間の出来事を彼女に尋ねたとき、彼女は昼食のとき目にしたことを何一つ話さなかった。共犯に問われることもなく、ベルナルが服用しているヒ素剤に、医師の注意を促すことは容易だったはずだ。たとえばこんな風に：「そのときは気がつかなかったのです……みんな火事のことです動転していましたから……でも今は誓って言えますわ、2 倍の量を垂らしていたと……」。だが彼女は黙っていた。話そうという気持ちのかけらもなかったのか？ 昼食の席でも知らぬ間に彼女の内にあったその犯行は、まさにこのとき彼女の存在の深部から、まだ形は成さないまま、意識に半ば浸されつつ、浮かび上がり始めたのだった。

医師が帰って行ったあと、彼女は眠っているベルナルをつくづくと見て思った：「それがアレのせいだと証明するものは何もない。虫垂炎の発作かもしれない。ほかに何の徴候もないとは言っても……。あるいはインフルエンザのケースかも」。しかし、ベルナルは翌々日になるともう自分の脚で立てるようになった。「アレだという可能性はたくさんある」だがそう言い切れたわけではない。できれば確信したかったのだ。「そう、私は恐ろしい誘惑のとりこになる気は全然なかった。ちょっと危険な好奇心を満足させたいということだったのだ。ベルナルが居間にはいてくる前にファウラー液を彼のコップに垂らした最初の日、私が自分に言い聞かせていたのはこういうことだった：『これ一回だけのことよ、はっきりさせるため……これがあの人を病気にしたのかどうか、これでわかるわ。一度だけ。それでお終い』。」

汽車は速度を緩め、長い汽笛を鳴らして、また走り出した。闇の中に二つか三つ信号が映った。サン・クレールの駅だ。だがテレーズにはもう何も検討することがなくなっていた。彼女は大きく口を開けた犯罪の中に落ち込んでしまった。犯罪に飲み込まれてしまった。その後のことは、ベルナルが彼女以上によく知っている。あの突然の病気再発、そして日に夜を継いでの



テレーズの看病。彼女は体力の限界に達しているかに見えたが、何一つ食べ物を口にしなかった（ベルナルが彼女にファウラー療法を勧め、ペドメイ医師から彼女のために処方箋を書いてもらったほどだった）。気の毒なドクター！ 彼はベルナルが吐いた緑色の吐瀉物に仰天した。病人の脈拍と体温との間にこのような不一致があり得るとは到底思えず、腸チフスに似た軽症のケースに高熱を出していながら脈拍が正常である場合もあることを確かめた——だがはげしい動悸と平熱以下の低温とが意味するものは？ きっとインフルエンザだ。感冒ならどんな説明も可能だ。

ラ・トラヴ夫人は名高いコンサルタント医師に来てもらおうと考えたが、古い友人であるドクターの機嫌を損ねるのは望ましくなかったし、テレーズはベルナルを驚かせたくなかった。しかし8月半ば、前より警戒すべき発作のあと、ペドメイは自分から同業者の一人に意見を聞こうという気を起こした。幸い明るくなる日になるともうベルナルの病状は好転し、3週間後には全快と言われるようになった。「我ながら上手く急場を抜け出したな。エライさんに来る暇があったら、この療治のすべての功績をもっていかれるところだった」とペドメイは言った。

ベルナルは、モリバト猟のためにすっかり回復していなくて、との考えからアルジュルーズに身柄を移させた。テレーズはこの時期ひどく疲れていた。クララ叔母さんがリウマチのはげしい発作のためにベッドにくぎ付けとなり、あらゆることが若妻の肩にかかってきたのだった。二人の病人、一人の幼児、それに加えてクララ叔母さんがやりっぱなしにした仕事の数かず。テレーズはアルジュルーズの貧しい人々に対して叔母さんがしていたことを代わって引き継ぐことに、多大の善意をかたむけた。小作人の家々を回り、叔母さんがしていたように、医師の処方箋を薬局に持って行き、薬代を払ってやった。ヴィルメジャの小作人屋敷が閉じられたままになっているのを寂しいとも思わなかった。もうジャン・アゼヴェドのことも、世界中誰のことも頭にのほらなかった。彼女はひとり、目もくらむ思いで、トンネルを

通り抜けようとしていたのだ。いまが一番暗いところだ。何も考えず、獣のように、この暗闇を、この煙の中を、抜け出さなくてはならない。自由な空気に辿り着かなくてはならない。早く、早く！

12月の初め、病気の再発がベルナルを地面に叩きつけた。ある朝よめきながら目覚めると両脚が麻痺し感覚を失っていた。それに続いて起こったことと言ったら！ ラ・トラヴ夫人がある晩ボルドーから連れてきたコンサルタント医師、病人を診察したあとの長い沈黙（テレーズはランプを持って立っていたが、バリオンはその顔がシートよりももっと白かったことを覚えている）薄暗い踊り場でペドメイは立ち聞きしているテレーズに聞こえないようにと声を潜め、同業者にこう説明する：薬屋のダルケが2通の偽造処方箋を彼に見せた。1通には犯罪者の手でファウラー液と書き添えられている。もう1通にはクロロフォルム、ディジタリン、アコニチンと、かなり強い薬の処方方が記載されている。バリオンがこれらを他の多くの処方箋といっしょに薬剤師のもとへ持ってきたのだった。ダルケはこうした劇薬類を渡してしまったことに悩んで、翌日ペドメイのもとへ駆けつけたのだった……。そうだ、ベルナルはこれらのことすべてをテレーズ自身と同じようによく知っている。救急車が彼をボルドーの私立病院に運び、その日を境に彼は回復し始めた。テレーズはひとりアルジュルズに残ったが、その孤独さがどのようなものであったにせよ、彼女は自分が大きな騒めきに包まれているのを感じていた。まさに猟犬が近づいてくるのに耳をすませながらうずくまる獣だ。狂ったように駆け抜けた競走の果てのように力尽きて——あたかもゴール直前に、手はすでに伸ばしきったところで突然脚が萎え、地べたに昏倒したかのようだった。冬の終わりがけ、父親が訪ねて来て、無実を証明するようにと彼女に懇願した。まだ万事救われる余地はある。ペドメイは告発を取り下げてもよい、と言っている。数多い処方箋の中で、一枚が完全に彼の書いたものではない、とは言い切れなくなったのである。そしてアコニチン、クロロフォルム、ディジタリンに関しては、このような強い劇薬を処方した

はずはないが、病人の血液からそれらの痕跡がまったく検出されていない以上……。

テレーズはクララ叔母さんの枕元で父とやりあったときのことを思い出す。薪の火が寝室を照らしていた。二人ともランプを点しなかった。彼女は教科書の文章を暗誦する子供のように一本調子な声で（その文章は幾夜もかけて眠らずに覚えたものだった）こう説明する：「道でひとりの男性に出逢いました。その人はアルジュルーズの住民ではなくて、わたしにこう言ったのです。わたしがダルケさんのところへ使いをやるのだったら、彼の処方箋もついでに持っていってもらえないか、と。彼はダルケに借金をしていて、薬局に姿を現したくないのだと……。彼はうちまで薬を取りにくると約束しました。でも名前も、住所も教えませんでした……」。

「もっと違う話をみつけてくれ、テレーズ、お願いだよ、家族のためだ。違う話を、さ。これじゃあ駄目だよ」。

ラロック親父は執拗に彼独自の非難を繰り返した。耳の不自由な叔母は半ばそばだてた耳で、テレーズの上に恐ろしい脅威が及んでいることを感じ取り、「何と言っているの？ 何が起こったの？ どうしてみんながおまえをいじめるの？」と呻くように言っていた。

その叔母に向かってようやく微笑みかけ、手を握ってやる力を見出す一方で、彼女は日曜学校で教理を教わる子供のように繰り返した：「道で一人の男性に逢いました。あたりが暗かったので顔は見えませんでした。どの小作屋敷に住んでいるのかも言いませんでした」。別の晩、その男は薬をとりに来た。運悪く、誰も家にいなかったため、彼を見た者はいない。

## IX

サン・クレールに着いた。汽車から降りたとき、テレーズは誰にも気づかれなかった。バリヨンが切符を戻しに行っている間に、彼女は駅舎の周りを迂回し、満員の車両の向こうで、2輪馬車の待っている道路に到達した。

この2輪馬車はいまや彼女の隠れ家であった。でこぼこ道を行くので、誰にも遭う心配はない。やっとの思いで作りあげた彼女の物語はすべて崩れ、用意した告白からは何も残っていない。何も。弁護のために言うべき言葉はなく、提供すべき理由も一つとして存在しない。一番簡単なのは黙ることだ、でなければ質問にだけ答えること。何を怖がることがある？ あらゆる夜と同じように今夜も過ぎるだろう。明日になれば日が昇る。何が起こったところで、そこから抜け出せる自信はある。それに彼女を世間から、そして彼女自身の存在自体から隔てているこの無関心、このどうしてもよさほど、悪いものがあるだろうか。そう、生のなかの死。彼女は生きている人間が味わえる限りの死を味わっているのだ。

闇に馴れてきた眼に、道の曲がり角で、低い数軒の農家が横臥した獣のような恰好をしている小作人部落が映った。ここはアンヌが以前彼女の自転車の車輪に飛び込んでくる犬を怖がったところだ。もっと遠くではハンの木のもとに窪地が出来ていて、耐えがたい猛暑の日々も、この場所ではかりそめの涼しさが少女たちの火照った頬に宿るのだった。自転車に乗った子供が日除け帽の下で白い歯を見せながら、鈴を鳴らして大声で「ご覧よ！ 両手離すから！」と叫ぶ。ごちゃまぜになったイメージがテレーズの心を引き止め、過ぎ去った日々のなかに彼女が見出すこうした諸々のことが、力尽きた心を憩わせてくれる。彼女は馬の足音にリズムを合わせて機械的に言葉を繰り返す：「わたしの人生の無意味さ — わたしの人生の虚しさ — 限りない孤独

——出口なしの運命」。ああ、ベルナールはしてほしいと思う仕草を、ひとつとしてしてはくれないだろう。でもひょっとして、何も頼まないのに両腕を開いてくれたら！ 人の胸に頭をもたせて、生きている人の体に寄りかかって、泣くことができれば！

過ぎた夏の日、ジャン・アゼヴェドが腰を下ろした野原の土手が目にはいる。この世のどこかに、自分を理解し、尊敬し、愛してくれたでもあろう人々に囲まれて花開くことのできる、そんな場所があるなどと信じたとは！ しかし彼女の孤独さは、皮膚病を患う者とその潰瘍よりも、びたりと彼女に貼りついて離れない。「私のために出来ることは何もない。でも私に反して出来ることもない」。

「旦那さまとクララお嬢様ですよ」

バリヨンが手綱を引く。二つの人影が進んでくる。ベルナールはまだ弱ったままの体で、出迎えにやってきたのだ——安心したくてたまらなかったのだろう。彼女は腰を浮かせて、遠くから「不起訴よ！」と叫ぶ。「当り前だ！」という以外に返事はなかった。ベルナールは叔母さんを助けて2輪馬車に乗せ、自分も乗って手綱を握った。バリヨンは歩いて帰ればいい。クララ叔母さんは夫婦の間に座った。万事うまく行った、と耳元で怒鳴ってやらなくてはならなかった（もっとも、叔母さんはこのドラマについてぼんやりした知識しか持っていなかったが）。いつもの癖で、耳の不自由な彼女は息を切らせてしゃべりはじめた。あの連中はいつでも同じ戦法でやってくる、ドレフェス事件の蒸し返しだ：「中傷するがいいさ、中傷するがいいさ、そこから何かは必ず残るからね。あの連中はものすごく強いのに、共和主義者たちは自分らの親衛隊によりかかるなんて間違いを犯していたのさ。あのむかつく連中にちょっとでも隙をみせたらさいご、あっというまにとびかかってきて……」。

クララ叔母さんは息をはずませながら、ローソク台を手に、階段を登りかけた。

「あんた方、まだ寝ないのかい？ テレーズはもうへとへとだろうよ。寝室にスープと冷たい鶏料理を置いてあるからね」

しかし夫婦は玄関に立ち尽くしていた。老女のしている前でベルナールが居間の扉を開け、テレーズの前で脇へ退き、彼女の後を追って姿を消した。もし叔母さんが聾者でなかったら、耳をそばだてるところだが……、生きながら壁に埋められている彼女を警戒する者はいない。それでも彼女はローソクを消して手探りで階段を下り、鍵穴に片目を当てた。ベルナールはランプの位置をずらせていた。明るく照らし出されたその顔は怖じ気と同時に尊大さを浮かべていた。叔母さんにはテレーズの座っている背中が見えた。外套と縁なし帽をソファに投げ出している。暖炉の火が、彼女の湿った靴から湯気を立てさせていた。夫の方へ顔を向けたテレーズが微笑みを浮かべているのを見て、老婆は胸をなで下ろした。

テレーズは微笑んでいた。厩舎から屋敷までの、空間と時間のわずかな間隔のうちに、ベルナールの脇を歩きながら、ふいに彼女は何をすればいいのかが分かった、それを悟ったという気になった。この男の姿が目にはいった途端、説明しよう、告白しよう、という彼女の気持ちは雲散霧消してしまっていた。われわれは、一番身近に知っている人々を、彼らが眼の前からいなくなるや否や、どれほど変形させてしまうことか！ この旅の途上、彼女は知らず知らずのうちに、彼女を理解できるベルナール、理解しようと努めるベルナールを、一生懸命につくりあげてきたのだった——だが一目見ただけで、彼はあるがままの姿を彼女に現した。生涯にただの一度も、他人の身になってみようとしたことのない人、相手の見ているものを見るために自分自身から抜け出す努力を知らない人。ベルナールは彼女の話聴くだけでも聴くのだろうか？ 測量師のように大股で、広い、湿った、天井の低い部屋を歩きまわり、その足の下で腐りかけた床板がぎしぎしと音を立てた。妻の方へ目をやりもしない——長いことかけて考えてきた文句で頭が一杯だったの

だ。そしてテレーズの方も、これから言うべきことがわかっていて。こうした場合の最も簡単な解決法は、それまで考えもしなかったことの中にあるものなのだが。彼女はこう言おうとしていたのである：「わたしは消えてなくなりますわ、ベルナール。もう心配なさなくて大丈夫。いますぐにでも、お望みなら、夜の闇に姿を消します。森は怖くはありません。暗闇も。そうしたものはわたしを知っているし、わたしたちは知り合いなのです。わたしはこの乾ききった、渡り鳥と野をさすらう猪のほかに生き物のいない土地に合わせて作られているのですもの。放り出されて結構。わたしの写真はみんなお焼きください。娘がわたしの名前すら知らずに育とうと、家族の目にわたしが存在したことがないかのように映ろうと、いっこう構いません」。

早くもテレーズは口を切った。

「いなくならせてくださいな。ベルナール」

その声が聞こえるや否や、ベルナールは向き直った。部屋の奥から、青筋を立てて突進してきて、口ごもりながら、言った。

「なにィ？ あんた、なんか意見がある？ 誓を立てる？ そんなことできるとでも思ってるのか？ ふざけるな。もう一言も喋るなよ。聞いてりゃいいんだよ。俺の命令を受ければいいんだ——あんたは俺の下した決定が取り消しのきかないことを立証すればそれでいいんだ」

もう口ごもってはいなかった。いまは周到に準備された文句を取り戻している。暖炉に寄りかかって、重々しい口調で、ポケットから紙切れを取り出してそれを見ながら、言おうと思うことを述べている。テレーズはもう怖くなくなっていた。笑い出したかった。彼はグロテスクだ。グロテスクな生き物だ。彼がサン・クレール以外のどこでも笑いものにしなければならない下品なアクセントで、何を喋りまくったところで、彼女は出て行くのだ。このドラマのすべてはどうして起こったのか？ このドラマの肝心なところは、この愚かな男が生者の数から消えること以外にはなかったのだ。彼女は、震える紙片を持つ手の手入れされていない爪に目をとめた。カフスもつけていない。

この男は、自分らの穴の外に出たら滑稽でしかない田舎者のひとりなのだ。その人生がどんな主義主張とも、どんな理想とも、どんな存在とも関わりのない人物。ひとりの人間の生存に無限の重要性を与えているのは慣習でしかない。ロベスピエールは正しかった、ナポレオンも、レーニンも……。ベルナールは彼女が笑みを浮かべているのを見て、かっとなった。声を高めたので、彼女も聞かないわけに行かなかった。

「いいか、あんたは俺の手中にあるんだぞ、分かってるのか？ あんたは家族が決めた決定に従うんだ、そうでないと……」

「そうでないと……何よ？」

彼女はもう無関心を装う気はなく、ふざけた、からかうような口調で、声高に言った：

「もう遅いわ！ あなた、わたしに有利な証言をしてしまったのよ。前言を翻すことはもうできないわ。偽証罪に問われてしまうわよ……」

「いつだって新事実は発見されるさ。俺はデスクの抽斗に、その未公開の証拠って奴を仕舞ってあるんだ。幸いなことに、時効はない」

彼女に戦慄が走り、訊ねた。

「あなた、わたしをどうするつもりなの？」

彼はちょっとの間、メモを読んでいた。テレーズは、あの比類ないアルジュルーズの<sup>しじま</sup>静寂に耳を澄ませる。鶏が鳴く時刻はまだずっと先のことだ。この砂漠の中には、一滴の生きた水も流れてはいない。数知れない梢をゆるがすそよとの風もない。

「俺は個人的な見解に屈した訳じゃない。俺の気持ちなんぞどうでもいいんだ。大事なのは家族だよ。家族の利益があらゆる決定を左右するのだ。家族の名誉を守るために、俺は我が国の法を欺くことに同意したんだ。神がご存じだよ」

この勿体ぶった口調にテレーズは胸が悪くなった。できればもう少し素直に自分の感情を表してくれ、と頼みたかった。



「大切なのは、家族にとって大切なのは、世間があんたと俺とは一体だと思ふことだよ。世間の目に、俺があんたの無実を疑っているようには見えないことだ。一方で、俺はできる限り……」

「あなた、わたしが怖い？ ベルナール」

「怖いかって？ いいや。身の毛はよだつが」それから「さあ、さっさと、それから一度で全部言ってしまうようにしましょう。明日はこの家を離れて隣のデスケルー一家に移ることになる。俺はあんたの叔母さんを俺の家に入れたくない。あんたの食事はバリオントがあんたの寝室に運んでくる。ほかの部屋への行き来は禁じるが、森の中を散歩するのはかまわない。日曜日には一緒にサン・クレールの教会の大ミサに与る。俺と腕を組んだところを人に見せるんだ。それから月の第1木曜日には、揃って幌を上げた馬車で、B市の市<sup>いち</sup>に、つまりあんたの父親のところへ行く、いままでしてきたように、だ」

「で、マリは？」

「マリは明日、子守と一緒にサン・クレールに移る。それからお母さんが南仏<sup>ミディ</sup>へ連れて行く。健康上の理由をみつけるさ。まさかあの子をあんたの手に任せてもらえるなんて思うまいな？ あの子だって安全なところへ避難させなくちゃあ！ 俺が死ねば、あの子が、21歳で地主さまになるんだから。亭主のあとは子供だ……そうだろ？」

テレーズは立ちあがっていた。危うく叫び声を上げるのをこらえて、

「それじゃ、あなた、あれは松のためだったと思っているの？ わたしが……」

彼女の犯行の隠れた無数の動機から、この愚か者は何一つ見つけだすことができず、一番次元の低い理由を拵えあげていたのだ。

「もちろん、松のためさ……。どうしてそう思うかって？ 消去法で行けばいいんだ。ほかに何か動機があるなら言ってみろ……。もっとも、動機なんか重要ではないし、俺の関心も引かない。もう、あれこれ考えるのはやめた。あんたには何の値打ちもない。ただあんたにくっついてる名前だけは、

残念ながら物を言うがね！ 何か月か経てば世間も俺たちの仲がうまく行っていると納得するだろうし、アンヌはドギレムの息子と結婚しているだろう……。あんたも知っての通り、ドギレム家は猶予を求めている。考える時間が欲しいと言って……。これさえ片付いたら、俺はやっとサン・クレールに腰を据えられるというもんだ。あんたはここだぞ、ここに残るんだぞ。ノイローゼということにして、あるいは別の……」

「精神病ね、たとえば？」

「いや、それはマリに傷がつくかもしれない。しかし、これぞという理由ならいくらでも見つかる。大丈夫だ」

テレーズは呟く：「アルジュルズに……。死ぬまで……」。彼女は窓に近づき、窓を開けた。この瞬間、ベルナールは心底からの歓喜を味わった。いつも彼を怖じ気づかせ、卑屈にさせていたこの女を、今夜自分はなんと上から見下していることか！ どんなにこの女は蔑まれていると感じているだろう！ 彼は自分の鷹揚さが得意だった。ラ・トラヴ夫人は彼に、お前は聖人だよ、と繰り返して言っていたし、家中の者が彼の心の広さを褒め称えていたが、彼自身はこの時生まれて初めて、この偉人らしい気分を味わったのだった。病院で、慎重の上にも慎重を重ねて、テレーズの未遂の殺意が彼に明かされたときの彼の冷血ぶりは、多くの賞賛的だったが、ほとんど努力なしに獲得されたものだった。愛することのできない人間にとって、真に深刻なことは何もない。ベルナールが大惨事の回避されたあと、この種の震える歓喜のみを味わったのは、彼が愛なき人であった故である。このことは、自分が長年にわたり、知らぬ間に、たけり狂う狂人と心を通じて生きて来たことを誰かに明かされた人間ならば、深く感じとることのできる真実なのだ。しかし今夜のベルナールが感じているのは己の強さだった。人生を支配している気分だった。まっすぐな精神、正しい理性の人に解決できない難問のないことに感服していた。あのような苦しみの翌日すでに自分は、人間は己が過失による以外に不幸にはなり得ないという思想を支持する心境に達する用意があっ

たのだ。こうして彼はドラマのなかでも最悪なドラマを、ほかのつまらない物事を扱うように、杓子定規に処理してしまっていた。ほんとうのことなど、人に知られることはほとんどない。体面は保たれるだろう。もう彼を哀れむ者はいなくなるだろう。彼は哀れまれるのが嫌いだった。最後の切り札を握っている者が、<sup>モンスター</sup>怪物を女房にしたくらいで、人に蔑まれるいわれはない。それに独身暮らしには福もある。また死を間近に見たことは彼の所有地への、狩りへの、自動車への、食べること、飲むことへの好みを、つまりは生への執着を呆れるほど増大させていたのである！

テレーズは窓辺に立ち尽くしていた。白い砂利が少し目にはいり、家畜よけの柵の向こうからは菊の香りが漂っていた。その先には檜の木の実黒な塊が松の大群を隠している。しかし松脂の臭いは、見えないがすぐそこに迫った敵軍さながら、夜の闇に充満していた。テレーズには彼らが家を包囲しているのがわかった。その無言の嘆声彼女に達するこれらの衛兵たちは、幾冬もの間に痩せ衰え、灼熱の日々には息を切らせて行く彼女を見守ることになるだろう。緩慢な窒息の証人になるのだ。彼女は窓を閉め、ベルナルに近寄った。

「それじゃ、どうでもわたしを力づくで引き止めておくおつもりなのね？」

「いや、そりゃまあ、ご勝手ではあるが……だが、ちゃんと覚えているよ：あんたがここを出るときは、手が後ろに回っているんだぞ」

「大げさなこと！ わたしはあなたという人を知っているのよ。持って生まれた性質以上に意地悪ぶらないでね。あなたが家族をそんな恥づかしい目に合わせることなんかできっこないわ！ わたし、安心しています」

すると、彼は熟慮し抜いた人間として、ここを出るということは自ら犯罪を認めることを意味するのだ、と説明した。こうした場合最悪の醜聞は家族からはじき出されることなのだ、壊疽に侵された手足のように切断して、公衆の面前でそれを投げ捨てる、それ以外にないのだ、と。

「お母さんの要望でわれわれが中止するようになった当初の計画は、まさ

にそれだったんだ。これから裁判が通常の運びに従って始まるところだからな。これがアンヌやマリに関わることでなかったら……。まだ時間はあ  
る。返事を急がなくてもいい。明日まで待ってやろう」

テレーズは小声で言った。

「わたしにはまだ父が残っているわ」

「あんたの親父か？ まったく俺と同意見さ。あの人にはあの人の経歴もあれば、属している党派もある。日頃表明している考えは、何としてでもスキャンダルだけはもみ消そうということだ。少なくとも、あんたのためにしてくれたことには感謝しろよな。予審がばたばたと進んだのは、何と言っても親父さんの威光のお蔭さ……。もっとも、あの人の公式見解は、親父さん自身あんたに話したはずだがね。違うか？」

ベルナールはもう声を高めてはいなかった。ほとんど礼儀正しくさえなっていた。だがそれは彼が少しでも憐れみを感じているということではなかった。もはや呼吸する音さえ聞こえなくなってしまったこの女は、とうとう地べたに伸びてしまっていた。自分の真の居場所を見出したのだ。すべては秩序に戻りつつあった。ほかの人間の幸福は、こうした打撃を受けたらひとたまりもなかったろう。ベルナールはこの立ち直りに見事成功したのを誇りに思っていた。誰でも間違えることはある。それに誰もがテレーズのことで、間違えていた——ふだんならいちはやく周囲の人々に正しい裁きを下すラ・トラヴ夫人までが、そうだったのだ。それというのが、いまどきの人々は規律を重んじなくなってしまったからだ。テレーズが受けたような教育の弊害を信じなくなってしまったからだ。一種の怪物<sup>モンスター</sup>だ、おそらく。だが言っても甲斐ないことではあるが、もしあの女が神を信じていたら……恐れは叡智の始まりだから。と、そうベルナールは考えていた。またこうも考えていた：この一族の恥を味わいたくてうずうずしている町中の人々が、毎日曜日、ぴったり寄り添う夫婦の姿を見たらどんなにがっかりするだろう！ と。早く日曜日がきて、人々の顔が見たくてたまらない……。もっとも、人の裁き

は免れても正義の下す罰は逃れようがあるまい。彼はランプを取り上げた。上げた腕がテレーズのうなじを照らし出した。

「あんた、階上へはまだ行かないか？」

その声は彼女には聞こえていないらしかった。彼女を暗闇のなかに残して彼は出て行った。階段の下にはクララ叔母さんが、最初の段に腰を掛けてうずくまっていた。老女がまじまじと見つめるので、彼は無理に笑顔をつくり、腕をとって立ち上がらせようとした。しかし相手は立つのを嫌がった——臨終の主人のベッドにくっついて離れない老犬のようだった。ベルナールはランプをタイル張りの床に置き、老女の耳元で叫んでやった：テレーズはもうずいぶん気分がよくなったが、寝に行く前にしばらくひとりになりたいのだそうだと。

「そら、知っての通り、いつものおかしな癖ですよ」

そうだと、叔母さんはそれを知っていた。この若い人妻がひとりになりたいと思っているときに限ってテレーズのもとへは行って行くのは、叔母さんの不運だった。そこで老女に自分が邪魔なのだと感じさせるために、多くの場合、ドアを半開きにしておけばよいことになっていた。

クララ叔母さんは努力して立ち上がり、ベルナールの腕にすがって、大広間の真上にあたる自分の部屋に辿り着いた。ベルナールはそのあとから部屋にはいり、テーブルの上にローソクを点してやった。それから額にキスをして遠ざかった。叔母さんは彼から目を離さなかった。聞こえない人々の顔つきから、彼女に読み取れないものがあろうか？ ベルナールに寝室へ引っ込むだけの時間を残してから、彼女はまたそっとドアを開ける……と、彼はまだ踊り場において、手すりによりかかっている。煙草を一本巻いている。彼女は慌てて部屋にもどる。よろめく脚で、息せききって、もはや着替えをする力もなくして。彼女はベッドに寝転んだまま、両眼を見開いている。(続)